

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：32641

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2023

課題番号：20K22220

研究課題名（和文）前近代海域アジア史の新たな知見にもとづく高等学校地理歴史科の探究型教材の開発

研究課題名（英文）Development of Teaching Materials for Advanced Japanese History in Senior High School Based on Knowledge of Recent Maritime Asian Studies

研究代表者

大西 信行（ONISHI, NOBUYUKI）

中央大学・文学部・特任教授

研究者番号：10882342

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：現行の指導要領が重視する「主体的・対話的で深い学び」については、戦後の社会科発足にあたっては全く同じ表現ではないものの重視されたことであり、少なくとも1980年代初頭までは、史資料読解をベースにした日本史の授業が広く行われていた。その一方で、記入者が作成した教材を使って模擬授業を実施した結果、「何を覚えればいいのか分からない」という戸惑いが見られた。多くの大学生にとっては、「日本史＝覚えるもの」であり、教職志望の大学生の間で生徒が効率的に語句を覚えらるる授業がいい授業という思い込みが強固であることが分かった。そのような固定観念を打破することが今後の喫緊の課題と言えよう。

研究成果の学術的意義や社会的意義

前項でも述べたとおり、教職志望の大学生にとっては「日本史＝覚えるもの」であり、生徒が効率的に語句を覚えらるる授業がいい授業という思い込みが強固であることが分かった。そのような固定観念を打破することが、「主体的・対話的で深い学び」に基づく日本史教育を実現するために必要な喫緊の課題といえよう。しかし、少なくとも1980年代初頭までは史資料読解をベースにした日本史の授業が広く行われていた。そのときの教育内容を研究の進展によって教科書の内容が大きく書き換わった今日の日本史探究にそのまま持ちこむことはできないが、その事実は日本の歴史教育を改めるための大きなヒントになることは確かであろう。

研究成果の概要（英文）：The current guidelines' emphasis on 'independent, interactive and deep learning' was also emphasised at the inception of social studies after the war, although not in exactly the same expressions, and until at least the early 1980s, Japanese history classes based on the reading of historical materials were widely used. On the other hand, as a result of conducting mock classes using the teaching materials prepared by the entrants, some students were puzzled by the fact that they did not know what to memorise. For many university students, it was found that 'Japanese history = something to memorise' and that there is a strong assumption that a good class is one in which students can memorise words and phrases efficiently. Breaking down such stereotypes is an urgent task for the future.

研究分野：歴史教育

キーワード：日本史教育 歴史教育 海域アジア

### 1. 研究開始当初の背景

平成 30(2018)年 7 月に告示された新しい高等学校学習指導要領では、地理歴史科は 5 つの科目から構成される。そのうちの日本史探究は、必修科目である歴史総合の内容を踏まえて履修される選択科目である。その日本史探究の目的としては、「課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力」(現行『高等学校学習指導要領』p.63)を育むことが掲げられるとともに、「我が国の歴史の展開について、世界の歴史や歴史を構成する様々な要素に着目して、総合的に広く深く探究する」というイメージが示されている(平成 28 年 12 月に開かれた中教審第 109 回総会資料)。つまり、「日本史探究」では、広く深く探究することを通じて、グローバル化する国際社会に対応する資質・能力を育むことが求められている。

しかし、旧課程の日本史 B 教科書においては、前近代に関しては、国内の文献史料がほとんどない古代の一時期を除いて対外的な契機よりも内発的な発展を重視する枠組みによって記述されており、実際の授業の場において上述のイメージを具体化することは容易ではなく、日本の領域外の歴史的事象と通底する要素や相互作用について教材化することは、新課程の教科書や授業実践に課せられた課題であった。

そこで、本研究では、

**「日本史探究」の前近代の内容にどのような内容を盛り込み、どのような課題を追求したり、解決したりする活動をすれば、高等学校学習指導要領が目的として掲げる資質・能力を育むことができるのだろうか。**

という問いを設定し、研究を進めることとなった。

### 2. 研究の目的

本研究は、多年にわたり高等学校で日本史や世界史を担当した申請者の経験をもとに、前近代海域アジア史の新しい研究成果を盛り込んだ副教材を開発し、前近代の日本がおかれていた国際環境や世界史と日本史とのつながりを、高校生が実感できるような授業作りを可能することを目指した。改めて指摘するまでもないが、海域アジア史の諸研究は、従来主流であった日本史研究が明らかにしてこなかった、日本列島と外部との相互作用やつながりを明らかにしてきた。高等学校日本史の授業において日本の国際環境に言及することは、学習指導要領が長らく求めてきたにもかかわらず、前近代については十分になされてこなかった、それを実現するためには、海域アジア史の研究成果を教材化することが不可欠である。

日本史探究と同じく新しい指導要領でおかれる、18 世紀以降の歴史を対象とした新科目「歴史総合」に対応するためのノウハウは、本研究を開始した 2020 年においても着実に積み上げられていたが、前近代については、十分になされていたとはいえなかった。日本史探究を意識した教材研究の成果は、2020 年の時点でも数点公刊されていたが、「主体的・対話的で深い学び」という表現でその重要性が強調された、アクティブ・ラーニングなどをはじめとする指導技術を紹介することに重点が置かれ、授業内容の大胆な精選・再構成によって生徒が学ぶ内容を体系的に見直す段階には、至っていなかった。この点を具体的な教材や教授例を示して進展させるのが本研究の目標である。

### 3. 研究の方法

本研究は、以下のステップを踏んで行った。なお、新型コロナウイルス感染症流行の影響もあって、当初本研究を構想した時に予定していた出張授業を行うことはできなかった。そのかわり

に、記入者が担当している教職科目の授業で本研究の成果として生み出された教材を用いて模擬授業を行い、その感想や改善策を挙げてもらった。

(1) 研究初年度にあたる 2020 年度は、中学校社会科歴史的分野・高等学校日本史の教材収集と年間の授業計画などの分析・検討、日明・日朝関係、東南アジア、北東アジアなどに関する漢文・欧文の史料、地図や絵画ならびにそれらについての研究論文の収集、そして、協力者の方に適宜意見を求めつつ授業実践案の作成をおこなった。しかし、各地の図書館や資料館等に所蔵された資料については、開館・閲覧制限や記入者の健康上の理由もあって十分な調査を行なうことはできなかった。

(2) 2021 年度は、初年度におこなった教材や資料の収集・分析を継続するとともに、研究協力者との対話を重ねながら授業実践案の作成をおこなった。

(3) 研究期間を延長した 2022 年度は、当初予定していた高等学校への出張授業に代えて、記入者が作成した教材を用いて、担当する教職科目の授業で中・高教員志望の学生を対象に模擬授業を行い、フィードバックを得た。また、長年にわたって日本史研究と教育をつなぐ実践を行ってきた教員たちと座談会を行ない、現状の日本史教育を取り巻く課題の整理を行い、年度末には新科目の日本史探究が高等学校で実際に授業が行われるに際して、高等学校の日本史教育が現状抱える課題や新科目で取り入れられるべき視点を取り上げた公開シンポジウム（立教大学日本学研究所主催）を企画・共催した。

(4) 再延長した 2023 年度には、以前の期間の研究成果を再検討し、より研究の質を高めようとした。そして年度末には、日本史教育と宗教との関係に主題をあてた公開シンポジウムを主催者（立教大学日本学研究所）とともに企画し、共催した。

#### 4. 研究成果

本研究の研究成果は以下の 3 点にまとめることができる。

(1) 今回の高等学校指導要領改訂は、既存の地理歴史科の科目構成を大きく変えるだけでなく、「主体的・対話的で深い学び」のかけ声のもと、アクティブ・ラーニングの導入が義務化されるなど、大きな変革を高校の教育現場にもたらすものと捉えられてきたが、記入者は、今次改訂は従来の指導要領の延長線上にあるに過ぎないと考えているべきであり、現在の大学の教職課程に求められることは、現行の概説科目や教科教育法の内容が、従来の学習指導要領を十分に踏まえたものであったかどうかを検証すること、そして、もし不十分であったと評価しうらば、真に現行の学習指導要領の内容に沿ったものにすべく再構成することではないかと考えられる。

(2) 現行の指導要領が重視する「主体的・対話的で深い学び」については、戦後の社会科発足にあたっては全く同じ表現ではないものの重視されたことであり、少なくとも 1980 年代初頭までは、史資料読解をベースにした日本史の授業が広く行われていたことが知られている。その内容を、研究の進展によって教科書の内容が大きく書き換わった今日の日本史探究にそのまま持ちこむことはできないが、現状の日本史教育を改めるための大きなヒントになることは確かであろう。

(3) 記入者が作成した教材を使って模擬授業を実施した結果、難しい用語を使っていないにもかかわらず、「何を覚えればいいのか分からない」という戸惑いが見られた。やはり、多くの教員志望の学生にとっては、「日本史 = 覚えるもの」であり、生徒が効率的に語句を覚えらるる授業がいい授業という思い込みが強固であることが分かった。そのような固定観念を打破することが今後の喫緊の課題といえよう。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 大西 信行、竹田 和夫、横井 成行、佐藤 雄基、オオニシ ノブユキ、タケダ カズオ、ヨコイ シゲユキ、サトウ ユウキ	4. 巻 83-1
2. 論文標題 「歴史学と歴史教育の新たな協力を目指して 過去に学び、未来を考える」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 史苑	6. 最初と最後の頁 101 ~ 132
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14992/00022563	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大西信行	4. 巻 45
2. 論文標題 『朝鮮王朝実録』に収められた二つの《良懷上表文》	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中央史学	6. 最初と最後の頁 80-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大西信行	4. 巻 27
2. 論文標題 高校生の学習経験はどう変わるか：高校日本史の新学習指導要領について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 教職課程年報	6. 最初と最後の頁 6-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 1件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 大西信行
2. 発表標題 趣旨説明
3. 学会等名 公開シンポジウム「歴史教育のなかの宗教：「日本史B」から「日本史探究」へ」
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 大西信行
2. 発表標題 洪武帝にとっての朝貢国「日本」：《良懷上表文》をめぐって
3. 学会等名 高麗大学校歴史教科海外学者招待講演（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 大西信行
2. 発表標題 明代の日本地誌に収められた《良懷上表文》
3. 学会等名 2023年春期連合学術大会（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大西信行
2. 発表標題 日本の中学・高校教科書における《新安沈船》
3. 学会等名 国際シンポジウム「日韓の歴史教育における「新安沈船」」（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大西信行
2. 発表標題 趣旨説明
3. 学会等名 「はじめての日本史探究：歴史教育と歴史学の幸せな関係を求めて」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大西信行
2. 発表標題 大学で教職科目を担当する元高校教員の立場から
3. 学会等名 第70回日本西洋史学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	横井 成行  (YOKOI Shigeyuki)		
研究協力者	矢部 正明  (YABE masaaki)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 はじめての日本史探究：歴史教育と歴史学の幸せな関係を求めて	開催年 2023年～2023年
国際研究集会 歴史教育のなかの宗教：「日本史B」から「日本史探究」へ	開催年 2024年～2024年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------